

資料

障害児の自然災害時の備えに関する国内文献検討

野口 裕子¹, 平澤 則子¹

1 新潟県上越市新南町 240 新潟県立看護大学

要 旨

【目的】 障害児の災害時の備えに関する知見を国内文献から整理する。**【方法】** 文献研究を行った。医学中央雑誌 Web 版 (Ver.5) を用いて、検索式を「災害 and 備え and 障害児」、絞り込み条件を「会議録を除く」として 2019 年 11 月 1 日に検索を行い、13 件の文献を分析した。**【結果】** 現在行っている備えは《障害児の生命を守る備え》,《障害児の生活を守る備え》,《子どものセルフケア能力を高める備え》,《地域とのつながりを作る備え》の 4 カテゴリーに分類された。今後必要な備えは《障害児の生命を守る備え》,《障害児の生活を守る備え》,《子どものセルフケア能力を高める備え》,《地域とのつながりを作る備え》,《あってよい関係機関が担う備え》の 5 カテゴリーに分類された。**【結論】** 障害児と家族を取り巻く関係機関の関係者が、いざという時を想定した備えについて障害児や家族と一緒に考えていく機会を作ることが望まれる。

文献情報

キーワード:

自然災害,
備え,
障害児

投稿履歴:

受付 令和元年11月21日
修正 令和2年1月10日
採択 令和2年1月17日

論文別刷請求先:

野口裕子
〒943-0147 新潟県上越市新南町240
新潟県立看護大学
電話: 025-526-2811
E-mail: yuko@niigata-cn.ac.jp

はじめに

我が国は、その位置、地形、地質、気象などの自然的条件から、台風、豪雨、豪雪、洪水、土砂災害、地震、津波、火山噴火などによる災害が発生しやすい国土である。¹ 富川² は、東日本大震災を経験し、被災者の声をヒアリングしながら、子どもや要介護者、特殊なケアの必要な方の防災術を冊子にまとめた。その冊子の中で、特別なニーズのある子どもの防災として、「災害時に理解されづらい特別なニーズのある子どもには、事前の準備が必要」であることや、「発達障害は理解されづらい」ことなどから、備えの必要性が強調されている。理解されづらい特別なニーズのある子どもを含め障害児のいる家庭では、災害時の備えが必要である。2013年の災害対策基本法改正により、内閣府は避難行動要支援者の避難行動支援に関する取組指針³ を策定した。この避難行動要支援者には理解されづらい特別なニーズがある子どもが含まれると考えられるが、その災害時の備えに関する実態については十分に把握されているとはいえない。そこで、本研究は障害児の自然災害時の備えに関する知見を国内文献から整理することを目的とした。大規模災害における保健師の活動マニュアル⁴ において、災害時要援護者の具体的な対象者に、単身高齢者、寝たきり高齢者に加えて、視覚障害(児)者・聴覚障害(児)者・肢体不自由(児)者・内部障害(児)者・精神障害(児)者・知的障害(児)者・発達障害(児)者が含まれている。そこで本研究において「障害児」を、「視覚障害児・聴覚障害児・肢体不自由児・内部障害児・精神障害児・知的障害

児・発達障害児」と定義した。

方法

1. 研究デザイン

文献研究

2. 文献選定方法

文献選定方法は、「医学中央雑誌 Web 版 (Ver.5)」を用い、1964 年～2019 年を対象に、検索式を「災害 and 備え and 障害児」、絞り込み条件を「会議録を除く」として 2019 年 11 月 1 日に検索を行い 22 件であった。検出文献のうち、障害児の災害時の備えに関する記述がある 13 件を分析対象とした。

3. 分析方法

文献中の記述から、①障害児を持つ家族が現在行っている備え、②障害児と家族にとって今後必要な備えを含む一

文を抽出し、コードとした。一つの文献から抽出するコード数は特に規定していない。次に、コードの類似性に基づき分類・命名しカテゴリー化した。対象文献の選定、コード・分類・命名に関しては研究者間で一致するまで文献内容と照合しながら検討し決定した。②障害児と家族にとって今後必要な備えについては、論文の著者が今後必要な備えとして提言している内容を抽出した。

4. 倫理的配慮

本研究は文献検討であるため、研究倫理委員会による審査は受けていない。分析対象文献の抽出時は、論文の論旨や文脈の意味を違わないよう配慮した。

結果

1. 障害児の自然災害時の備えに関する研究の動向と分類 (表 1)

13 件⁵⁻¹⁷ の文献の種類は「原著論文」が 5 件、「解説・特集」

表 1 分析文献の概要

No.	タイトル	著者	雑誌名, 巻, 号, ページ番号	発行年月	論文の種類	現在行われている備え	今後必要と考えられる備え
1	【退院調整に必要な知識をアップデート】北海道胆振東部地震から学ぶ 災害時の対応と日頃の備え	鹿内あずさ	こどもと家族のケア 13 巻 6 号, 27-32.	2019.2	解説 / 特集		○
2	災害時に支えとなり得る地域との繋がりを築いていくための支援の検討 (第 1 報) 発達障害児の親の自然災害への備えの実情	細谷紀子, 石丸美奈, 宮崎美砂子	千葉看護学会誌, 24 巻 2 号, 31-41.	2019.2	原著論文	○	
3	【災害時の対応～熊本地震での対応から学ぶ】在宅の重症心身障害児 (者)・医療的ケア児の大地震時における備え	松葉佐正	こどもと家族のケア, 13 巻 1 号, 61-65.	2018.4	解説 / 特集		○
4	障害のある子どもが自然災害に備えるための取り組みの重要性	加藤令子, 小室佳文, 沼口知恵子, 佐藤奈保, 原朱美, 勝田仁美	小児保健研究, 76 巻 6 号, 510-514.	2017.11	解説		○
5	【訪問看護ステーションが「連携」の要になる「要配慮者」を見逃さない 訪問看護師ができる「災害時の支援」現場を支える研究者の取り組み 医療を必要とする子どもたちへのケア 災害時に備える「医療的ケア」を受け取る子どもたちへのケア	加藤令子	コミュニティケア, 19 巻 13 号, 110-117.	2017.11	解説 / 特集		○
6	肢体不自由のある中学部生徒の自然災害への備えに関する認識特別支援学校 3 校に通学する子どもへの面接調査から	小室佳文, 加藤令子, 沼口知恵子, 西田志穂	小児保健研究, 74 巻 6 号, 863-870.	2015.11	原著論文		○
7	【重症心身障害 1- 総論, 診察, 栄養管理, 神経系】ピンポイント小児医療 重症心身障害に対する医療的支援 災害時における重症心身障害児医療 災害時に問題となる点と対応法, 事前の備え	田中総一郎	小児内科, 47 巻 11 号, 1894-1898	2015.11	解説 / 特集		○
8	教師が認識する日本の非常災害時の心身障害児のニーズ (Teacher-perceived emergency disaster needs of physically and mentally challenged school children in Japan) (英語)	Kato Reiko, Nishida Shiho, Komuro Kafumi, Numaguchi Chieko	Health Emergency and Disaster Nursing, 1 巻 1 号, 34-44.	2014.3	原著論文		○
9	東日本大震災における被災児童への精神医学的アプローチ 追跡調査と支援環境の整備について精神障害を有する児童への被災対応マニュアル 現状と課題	牛島洋景, 小山明日香, 青島真由, 黒江美穂子	日本社会精神医学会雑誌, 22 巻 3 号, 352-359.	2013.8	解説		○
10	災害の中を生きる困難と生活不安 首都圏に住む重度障害児者の東日本大震災での経験の特徴	山本美智代, 中川薫, 石上ゆか, 米山明, 加藤久美子, 伊藤真理子	小児保健研究, 72 巻 2 号, 298-304.	2013.3	原著論文		○
11	医療的ケアの必要な子どもへの支援 医療を必要とする子どもの災害への備え 子どものセルフケア能力を高めるために	加藤令子	小児保健研究, 71 巻 5 号, 637-646.	2012.9	解説		○
12	【在宅医療システムと病弱児・重症児の教育】東日本大震災と障害児医療 最も頼れる防災は地域ネットワークである	田中総一郎	障害者問題研究, 40 巻 2 号, 124-131.	2012.8	解説 / 特集		○
13	災害における看護師の役割の検討 障害を持つ子どもを抱える家族に災害についてのアンケート調査を実施して	種田希, 為我井恵子, 旭佐記子, 伊澤佳子, 加藤令子	ひろき: 茨城県立医療大学付属病院研究誌, 10 号, 15-20.	2007.9	原著論文	○	

表2 障害児をもつ家族が現在行っている備え

カテゴリー	サブカテゴリー	コード数(表1の分析文献番号-コード数を表示)
障害児の生命を守る備え	医療機器をすぐに持ち出せる準備をしている	4(文献13:4コード)
	機器は常に充電できている	3(文献2:1コード, 文献13:2コード)
障害児の生活を守る備え	食品や栄養剤を準備している	7(文献2:1コード, 文献13:6コード)
	非常時用の内服薬を常備している	4(文献13:4コード)
子どものセルフケア能力を高める備え	発災時の対策ができている	9(文献2:2コード, 文献13:7コード)
	発災時に子ども自身が対応できる準備をしている	4(文献2:4コード)
地域とのつながりを作る備え	地域の防災訓練に参加している	4(文献2:4コード)
	地域の人に助けてもらえる関係がある	3(文献2:3コード)

が5件,「解説」が3件であった。また13文献の年次推移をみると,2007年の1件から始まり,2012年以降は1年に1~2件で推移していた。現在行っている備えに関するコードは2件の文献から抽出された。また今後必要な備えに関するコードは11件の文献から抽出された。現在行っている備えと今後必要な備えが両方記述されている文献はなかった。

2. 障害児をもつ家族が現在行っている備え

現在行っている備えに関するコードは2件の文献から抽出された。対象は「医療的ケア児」が1件,¹⁷「発達障害児」が1件⁶であった。現在行っている備えとして,38コードが抽出され,8サブカテゴリー,さらに4カテゴリーに分類された(表2)。なお,カテゴリーを《 》,サブカテゴリーを〈 〉,コードを‘ ’で記す。

1) 《障害児の生命を守る備え》

このカテゴリーは,「吸引をしている患児の保護者は,吸引器の準備状況として,吸引に必要な物品はすぐに持ち出すことが可能である」といった〈医療機器をすぐに持ち出せる準備をしている〉ことや,「吸引をしている患児の保護者は,吸引器の準備状況として,常に充電をしている」といった〈機器は常に充電できている〉ことから形成されていた。

2) 《障害児の生活を守る備え》

このカテゴリーは,「発達障害児を持つ家族の備えとして一般的な防災バッグや水・食品の準備をしている」といった〈食品や栄養剤を準備している〉ことや,「災害時の対策として,内服薬の準備が出来ている」といった〈非常時用の内服薬を常備している〉,「発達障害児を持つ家族の備えとして,家の耐震化・家具の転倒防止をしている」といった〈発災時の対策ができている〉ことから形成されていた。

3) 《子どものセルフケア能力を高める備え》

このカテゴリーは,「発達障害の子どもに関する備えとして,子どもに向けた行動として,家以外の場所で被災した時のことを話した・約束事を決めている」といった〈発災

時に子ども自身が対応できる準備をしている〉ことから形成されていた。

4) 《地域とのつながりを作る備え》

このカテゴリーは,「発達障害児を持つ家族の備えとして,自治会の防災訓練等に毎年参加している」といった〈地域の防災訓練に参加している〉ことや,「発達障害の子どもに関する備えとして,周りの人に向けた行動として,子どもの特性を理解して助けてもらえるように周りの人にたくさん話す」といった〈地域の人に助けてもらえる関係がある〉ことから形成されていた。

3. 障害児と家族にとって今後必要な備え

障害児と家族にとって今後必要な備えに関するコードは11件の文献から抽出された。対象は「重症心身障害児」が3件,「医療的ケア児・重症心身障害児」が2件,「医療を必要とする子ども」が2件,「身体及び知的に障害がある子ども,医療的ケアを必要とする子ども」,「精神障害を有する児童」,「特別養護学校に通う児童・生徒」,「東日本大震災を経験した肢体不自由のある中学生」が各1件であった。今後必要な備えの内容は84コードが抽出され,15サブカテゴリー,さらに5カテゴリーに分類された(表3)。

1) 《障害児の生命を守る備え》

このカテゴリーは,「レスピレーターとアンビューバッグはペアにして置く」といった〈停電時でも医療的ケアができる備え〉から形成されていた。

2) 《障害児の生活を守る備え》

このカテゴリーは,「家庭で,日用品(食糧・水など)の備蓄は3日分を目安に準備する」といった〈食品の備え〉や,「災害時用に数日分の予備の内服薬を家庭や学校などに保管する」といった〈内服薬の備え〉,「懐中電灯をいつでも分かる場所においておく」といった〈発災時の備え〉,「子どもの所に駆けつける通路には,あまり物を置かない」といった〈発災時の避難への備え〉から形成されていた。

3) 《子どものセルフケア能力を高める備え》

このカテゴリーは,「子どもとともに,災害時の必要物品

表3 障害児と家族にとって今後必要と考えられる備え

カテゴリー	サブカテゴリー	コード数 (表1の分析文献番号 - コード数を表示)
障害児の生命を守る備え	停電時でも医療的ケアができる備え	8 (文献1:2コード, 文献3:3コード, 文献7:3コード)
	食品の備え	6 (文献1:5コード, 文献12:1コード)
	内服薬の備え	2 (文献7:1コード, 文献12:1コード)
障害児の生活を守る備え	発災時の備え	17 (文献1:8コード, 文献3:4コード, 文献7:1コード, 文献10:2コード, 文献12:2コード)
	発災時の避難への備え	5 (文献3:5コード)
子どものセルフケア能力を高める備え	子ども自身が主体的に備えることができる備え	4 (文献6:2コード, 文献10:1コード, 文献11:1コード)
	自然災害に備えるためのセルフケア	8 (文献8:8コード)
地域とのつながりを作る備え	日頃からのつながりが災害時に役立つ	8 (文献1:4コード, 文献3:2コード, 文献12:2コード)
	地域の防災訓練への参加	2 (文献1:1コード, 文献12:1コード)
	医療者が行う準備	6 (文献4:6コード)
	訪問看護師が行う準備	3 (文献5:3コード)
	医療機関が担う準備	1 (文献12:1コード)
あってよい関係機関が担う備え	福祉・教育機関が担う準備	2 (文献12:2コード)
	行政が担う準備	7 (文献7:1コード, 文献12:6コード)
	情報共有のための支援マニュアル作成	5 (文献4:1コード, 文献9:3コード, 文献11:1コード)

について④リストアップ, ⑥学校や家庭での保管方法, ⑦使用方法, ⑧避難時の持ち出し方法, ⑨定期的な点検, を検討する’といった〈子ども自身が主体的に備えることができる備え〉, ‘教師が認識する児童生徒が自然災害に備えるためのセルフケア能力は, 身を守ることであり’といった〈自然災害に備えるためのセルフケア〉から形成されていた。

4) 《地域とのつながりを作る備え》

このカテゴリーは, ‘人工呼吸器を装着している場合, 避難に有効なのは訪問看護師や業者と日頃のやりとりである’といった〈日頃のつながりが災害時に役立つ〉, ‘家庭で, 普段から地域の防災訓練に参加することで, この町内会にこんな子がこんな助けを必要としていることを知ってもらう’といった〈地域の防災訓練への参加〉から形成されていた。

5) 《あってよい関係機関が担う備え》

このカテゴリーは, ‘医療者が, 停電時や避難場所での対応など, 子ども自身と子どもを援助する保護者へ, 情報提供や指導を行う’といった〈医療者が行う準備〉, ‘訪問看護師は, 災害発生時に緊張が強くないよう, 子ども自身への声かけや子どもの傍で保護者と話し合いをすることが必要である’といった〈訪問看護師が行う準備〉, ‘普段から地域医療機関でレスパイト受け入れを行い, 災害時に備える’といった〈医療機関が担う準備〉, ‘福祉・教育機関で, 災害時に数日分の医薬品を普段から預かる’といった〈福

祉・教育機関が担う準備〉, ‘行政で, 障害児者の災害時の避難方法を確認する’といった〈行政が担う準備〉, ‘精神障害を抱える子どもと親の防災支援マニュアルには情報提供機能が求められる’といった〈情報共有のための支援マニュアル作成〉から形成されていた。

考察

1. 障害児の災害時の備えに関する文献の現状

障害児の災害時の備えに関する文献数は, 2019年11月の時点で13件であり, 論文の種類についても原著論文が5件であったため, 文献数は量, 質ともに少なかった。出版年度では, 2007年から始めて2012年以降は1年に1~2件で推移していた。文献が出始めた2007年は, 同年3月に「能登半島地震」が, 同年7月に「新潟県中越地震」が発生している。その後も2011年3月に発生した「東日本大震災」などの地震や, 2017年7月に発生した「平成29年7月九州北部豪雨」や2018年7月に発生した「西日本豪雨」¹⁸などの豪雨災害といった自然災害が頻発している。これだけの自然災害が発生している中で, 障害児がいる家族では災害への備えは必須であると考えられる。今後, 障害児の災害時の備えに関する研究の蓄積がなされることが期待される。

2. 障害児をもつ家族が必要に迫られて行っている備え

平成30年版防災白書には、減災のための具体的な行動として、地域の災害リスクを理解し、家具の固定や食料の備蓄等による事前の「備え」を行うこと、機会を利用して避難訓練に参加し、適切な避難行動を行えるように準備すること、また、発災時には近所の人と助け合う等、「自助・共助」による災害被害軽減のための努力も必要である、¹⁹と述べられている。本研究においても、《障害児の生活を守る備え》や《地域とのつながりを作る備え》が必要に迫られて行われていたと考えられる。自然災害発生後は、避難生活を含め災害発生前の生活に戻るまでの期間が長期化しやすいため、障害児を持つ家族は避難後の生活変化を見越した〈食品の備え〉や〈内服薬の備え〉〈発災時の備え〉〈発災時の避難への備え〉といった《障害児の生活を守る備え》を行っていたと考えられる。

人工呼吸器やたんの吸引が日常的に必要な医療的ケア児には、これらの操作を行うためには電源の確保が必要である。国内で最近発生した大きな自然災害の一つに、2019年10月6日の台風第19号がある。台風の影響で大雨による災害及び暴風等により、人的被害や住家被害、電気・水道・道路によりライフラインへの被害が発生した。²⁰このように、ひとたび災害が発生すると、ライフラインへの被害が発生し、そのことで停電することがある。停電すると生命維持に関わるので、〈医療機器をすぐに持ち出せる準備をしている〉ことや〈機器は常に充電できている〉ことといった《障害児の生命を守る備え》を行っていることがわかった。しかし、医療機器が必要な子どもの災害対策マニュアル²¹に示されているような市販蓄電池や自動車などの外部電源の具体的な確保の方法や自動車内のシガーソケットから電源を取る方法といった備えには至っていないことが考えられる。また、熊本県では熊本地震に伴う発達障害児者に関するアンケートを実施し「感覚過敏があり、音やにおいに敏感で避難所に入れなかった」や「人が多い所は苦手で落ち着かずパニックになりやすいので、周囲に迷惑をかけると思い、避難所に入れず、車中泊にした」のような結果²²を報告している。このことから、発達障害児を持つ家族は避難所での生活の難しさが考えられる。その対処として、本研究では、発達障害児の親を対象とした文献から《子どものセルフケア能力を高める備え》や《地域とのつながりを作る備え》が行われていることがわかった。以上のことから、障害児を持つ家族は必要に迫られて自然災害への備えを行っていることがうかがえた。本研究で分析された文献は2件と少ないが、医療的ケア児や発達障害児がいる家族は多くいると考えられる。また、自然災害も頻発している中で、災害への備えが重要であることから、今後は障害児がいる家庭における災害時の備えの取り組みが広がり、取り組みの評価がなされることが期待される。

3. 障害児と家族が《地域とのつながりを作る備え》を行うことの重要性

障害児と家族にとって今後必要な備えとして《地域とのつながりを作る備え》が分類された。重度重複障害の娘を持つ新田氏²³は、東日本大震災を娘と経験したことをきっかけに、人とのつながりの大切さを学び、地域で安心して暮らしていくために、おたがいさまの会を設立し、定期的に集まり、さまざまな不安や要望を行政に伝えたり、スロープ付き避難施設の設置を求める要望書を石巻市へ提出、署名したりする活動を通して、現在はコミュニティ活動に力を入れている。今後はこのような《地域とのつながりを作る備え》が全国の地域で広がっていくことが望まれる。

一方で、奥田²⁴は、神奈川県大和保健福祉事務所が実施した医療機器を必要とする児の備えに関する実態調査結果から、災害に備える地域づくりの問題として、①在宅療養児をもつ家庭の多くは、市町村の災害時要援護者リストへ登録をされていないこと、②その理由として、個人情報管理への不安、登録が望む支援につながるとは思えないという不信感などであったこと、③多くの保護者は、日々不安定な病状にある子どもの介護に精一杯な実情にあり、災害を想定した準備に余裕がないことや、身近に相談できる知人や友人がいない方も多いいことを紹介している。そして、その実態から高度な医療を必要としている子どもやその保護者が孤立することのない地域づくりが地域保健の役割だと認識し、在宅療養児の存在や、その育児の実態を、おなじく子育てをする地域の母親に広く知ってもらい、母親同士のつながりや支えあいが広がる取り組みを行ったと述べている。このように、医療機器を必要とする子どもと家族は、地域から孤立しやすいことがうかがえる。2013年の災害対策基本法改正により、内閣府は避難行動要支援者の避難行動支援に関する取組指針³を策定した。その内容は、避難行動要支援者名簿の作成を市町村に義務付け、避難行動要支援者本人からの同意を得て、平常時から消防機関や民生委員等の避難支援等関係者に情報提供することというものである。内閣府が提案する避難行動要支援者本人は、障害児やその家族を示す。障害児と家族が《地域とのつながりを作る備え》の重要性を理解し、積極的に取り組むことができるよう、行政は関係機関とともに支援していく必要があると考える。また、在宅療養児をもつ家庭は、個人情報管理への不安や不信感から要援護者リストへ登録していないこと²⁴から、行政は障害児を持つ家族の不安や不信感を払拭するための教育的関わりが必要であると考えられる。障害児と家族、地域住民がお互いに関わりあうことと、障害児と日頃から関わる関係機関が積極的に障害児と家族に関わり、《地域とのつながりを作る備え》を行う取り組みを地域全体で行っていくことが重要であると考えられる。

4. 障害児と家族にとって十分な備えができる支援のあり方

障害児と家族にとって今後必要な備えとして分類された4つの備え《障害児の生命を守る備え》,《障害児の生活を守る備え》,《子どものセルフケア能力を高める備え》,《地域とのつながりを作る備え》は, 障害児と家族が必要に迫られて行っている備えの内容と同様であった。自然災害の場合, 被災後からの災害サイクルのなかの亜急性期・慢性期が長くなることが多い。亜急性期・慢性期間が長いと障害児の生活の質の低下につながる事が予測されるため, 4つの備えをさらに強化していく必要があると考えられる。その時に,《あってよい関係機関が担う備え》が必要となると考えられる。この《あってよい関係機関が担う備え》の関係機関とは, 現在障害児とその家族に関わりがある機関である。これらの関係機関の担当者は, 日ごろの関わりの中で, 家族と「顔の見える関係」が確立されている。この「顔の見える関係」の中で, 障害児・家族と機関の担当者が一緒に検討していくことから始まると考えられる。しかし, 根岸ら²⁵は, 発達障害は「目に見えにくい障害」であるため, 本人も周囲も理解が難しく, 受容に時間がかかるといわれていると述べており, 必要な支援機関につながっていない障害児や家族への支援が課題である。市町村保健師は, このような障害児や家族の思いや考えを把握し, 必要な支援機関につなげる支援を行い, 災害への備えについて直接話しあう機会を作っていくことが望ましいと考えられる。以上より, 障害児と家族を取り巻く現在関わっている関係機関・今後必要な関係機関の関係者とともに, 災害への備えについて一緒に考えていく機会が増えていくことが期待される。

研究の限界と課題

今回分析した文献には, 帰納的方法で災害時の備えを収集し有用な文献が多いと思われたが, すべての研究においてその信頼性や妥当性があるかの検証が行われていない。また, 国外文献との比較検討も重要な課題であると考えられる。

結論

障害児の災害への備えに関する知見を, 国内文献から整理することを目的に研究を行った。分析対象文献は13件であった。現在行っている備えに関するコードは2件の文献から抽出された。現在行っている備えは,《障害児の生命を守る備え》,《障害児の体調を守る備え》,《障害児が災害後も安心して避難できるための備え》,《子ども自身ができる備え》,《地域とのつながりを作る備え》の4カテゴリーに分類された。障害児と家族にとって今後必要な備えに関するコードは11件の文献から抽出された。今後必要な備えは,《障害児の生命を守る備え》,《障害児の生活を守る備え》,《子どものセルフケア能力を高める備え》,《地域とのつながりを作る備え》,《あってよい関係機関が担う備え》の5カテゴリーに分類された。今後は, 障害児と家族を取り巻く関係機関の関係者が, いざという時を想定した備えについて障害児や家族と一緒に考えていく機会を作ることが望まれる。

え》,《子どものセルフケア能力を高める備え》,《地域とのつながりを作る備え》,《あってよい関係機関が担う備え》の5カテゴリーに分類された。今後は, 障害児と家族を取り巻く関係機関の関係者が, いざという時を想定した備えについて障害児や家族と一緒に考えていく機会を作ることが望まれる。

引用文献

1. 内閣府. 災害を受けやすい日本の国土. 平成22年版防災白書 2010; http://www.bousai.go.jp/kaigirep/hakusho/h22/bousai2010/html/honbun/2b_1s_1_01.htm, (2019.11.1 検索)
2. 富川万美代表 (NPO 法人ママプラグ). 全災害対応! 子連れぼうさい BOOK 1223 人の被災ママパパと作りました. 東京: 祥伝社, 2019: 120-121.
3. 内閣府. 避難行動要支援者の避難行動支援に関する取組指針. 2013; www.bousai.go.jp/taisaku/hisaisiyagyousei/youengosya/h25/hinansien.html (2019.11.6 検索)
4. 日本公衆衛生協会・全国保健師長会. 大規模災害における保健師の活動マニュアル 2013; http://www.jpha.or.jp/sub/pdf/menu04_2_h25_01.pdf (2019.12.12 検索)
5. 鹿内あずさ. 【退院調整に必要な知識をアップデート】北海道胆振東部地震から学ぶ 災害時の対応と日頃の備え. こどもと家族のケア 2019; 13: 27-32.
6. 細谷紀子, 石丸美奈, 宮崎美砂子. 災害時に支えとなり得る地域との繋がりを築いていくための支援の検討 (第1報) 発達障害児の親の自然災害への備えの実情. 千葉看護学会誌 2019; 24: 31-41.
7. 松葉佐正. 【災害時の対応~熊本地震での対応から学ぶ】在宅の重症心身障害児(者)・医療的ケア児の大地震時における備え. こどもと家族のケア 2018; 13: 61-65.
8. 加藤令子, 小室佳文, 沼口知恵子ら. 障害のある子どもが自然災害に備えるための取り組みの重要性. 小児保健研究 2017; 76: 510-514.
9. 加藤令子. 【訪問看護ステーションが「連携」の要になる「要配慮者」を見逃さない 訪問看護師ができる「災害時の支援」現場を支える研究者の取り組み 医療を必要とする子どもたちへのケア 災害時に備える「医療的ケア」を受ける子どもたちへのケア. コミュニティケア 2017; 19: 110-117.
10. 小室佳文, 加藤令子, 沼口知恵子ら. 肢体不自由のある中学部生徒の自然災害への備えに関する認識 特別支援学校3校に通学する子どもへの面接調査から. 小児保健研究 2015; 74: 863-870.
11. 田中総一郎. 【重症心身障害1-総論, 診察, 栄養管理, 神経系】ピンポイント小児医療 重症心身障害に対する医療的支援 災害時における重症心身障害医療 災害時に問題となる点と対応法, 事前の備え. 小児内科 2015; 47: 1894-1898.
12. Kato R, Nishida S, Komuro K, et al. Teacher-perceived emergency disaster needs of physically and mentally challenged school children in Japan. Health Emerg Dis Nurs 2014; 1: 34-44.
13. 牛島洋景, 小山明日香, 青島真由ら. 東日本大震災におけ

- る被災児童への精神医学的アプローチ 追跡調査と支援環境の整備について精神障害を有する児童への被災対応マニュアル 現状と課題. 日本社会精神医学会雑誌 2013; 22: 352-359.
14. 山本美智代, 中川 薫, 石上ゆから. 災害の中を生きる困難と生活不安 首都圏に住む重度障害児者の東日本大震災での経験の特徴. 小児保健研究 2013; 72: 298-304.
 15. 加藤令子. 医療的ケアの必要な子どもへの支援 医療を必要とする子どもの災害への備え 子どものセルフケア能力を高めるために. 小児保健研究 2012; 71: 637-646.
 16. 田中総一郎. 【在宅医療システムと病弱児・重症児の教育】東日本大震災と障害児医療 最も頼れる防災は地域ネットワークである. 障害者問題研究 2012; 40: 124-131.
 17. 種田 希, 為我井恵子, 旭佐記子ら. 災害における看護師の役割の検討 障害を持つ子どもを抱える家族に災害についてのアンケート調査を実施して. ひろき: 茨城県立医療大学付属病院研究誌 2007; 10: 15-20.
 18. 気象庁. 災害をもたらした気象事例 (平成元年～本年) 2019; https://www.data.jma.go.jp/obd/stats/data/bosai/report/index_1989.html (2019.11.17 検索)
 19. 内閣府. 自助・共助による事前防災と多様な主体の連携による防災活動の推進. 平成 30 年版防災白書 2018; www.bousai.go.jp/kaigirep/hakusho/h30/honbun/1b_1s_01_01.html (2019.11.6 検索)
 20. 気象庁. 台風第 19 号による大雨, 暴風等 令和元年 (2019 年)10月10日～10月13日 2019; https://www.data.jma.go.jp/obd/stats/data/bosai/report/2019/20191012/jyun_sokuji20191010-1013.pdf (2019.11.6 検索)
 21. 中村知夫 (編). 医療機器が必要な子どものための災害対策マニュアル～電源確保を中心に～. 2019; https://www.ncchd.go.jp/hospital/about/section/cooperation/shinsai_manual.pdf. (2019.12.16 検索)
 22. 熊本県. 熊本地震に伴う発達障がい児者に関するアンケート結果について (概要版) 2018; https://www.pref.kumamoto.jp/common/UploadFileOutput.ashx?c_id=3&id=25443&sub_id=1&flid=167217 (2019.11.19 検索)
 23. 新田理恵. 障害児者やお年寄りの居場所のある町内会づくり. 日本重症心身障害学会誌 2017; 42: 133.
 24. 奥田博子. 災害に備える地域のシステムづくり. 高知女子大学看護学会誌 2012; 2: 2-6.
 25. 根岸由紀, 葉石光一, 細瀬富夫. 特別な支援を要する子どもを持つ保護者の気づきに関する研究. 埼玉大学紀要 教育学部 2014; 63: 49-59.

A Review of Literature in Japan on Natural Disaster Preparedness for Children with Special Needs

Yuko Noguchi¹ and Noriko Hirasawa¹

¹ Niigata College of Nursing, 240 Shinnan-cho, Joetsu, Niigata 943-0147, Japan

Abstract

Objective: To describe and analyze current literature in Japan on natural disaster preparedness for families of children with special needs.

Methods: We reviewed and analyzed 13 references that described current preparation by families of children with special needs, and preparation that the children and their families may need in the future.

Results: Current preparation was categorized as that to “protect the life of the child with special needs,” “protect the physical condition of the child with special needs,” “heighten the selfcare abilities of the child with special needs,” and “connect with the community.”

Preparation thought to be needed in the future were categorized as that to “protect the life of the child with special needs,” “protect the physical condition of the child with special needs,” “heighten the selfcare abilities of the child with special needs,” “connect with the community” and that to be “made by appropriate organizations.”

Conclusion: Professionals in the organization involved with children with special needs should create opportunities to discuss preparation for natural disasters. Discussion should include professionals, the children’s families, and the children themselves.

Key words:

natural disaster,
preparedness,
children with special needs
